

の経験があると選んだ者は、男子で0.2%、女子で0.1%、全体で0.2%であったのに対して、「シンナー遊び」経験者では、男子で18.2%、女子で18.8%の者が、覚せい剤の乱用経験ありを選んだ。

大麻同様、中学生における「シンナー遊び」と覚せい剤乱用との強い関係が強く示唆された。

(5) 覚せい剤乱用による医学的害について

「覚せい剤を使うと、精神病状態になりやすく、またフラッシュバックがあることを知っていますか？」との問いに対する回答の分布を表 59 に示した。

回答の分布には、男女共に、「シンナー遊び」非経験者群の方で、「知っている」を選んだ者が%上は多かったが、有意差は認められなかった。これらも、有機溶剤乱用による医学的害知識、大麻吸引による医学的害知識の場合と同様、知識教育上の課題になると考えられる。

5. 違法薬物の入手可能性について

(1) 乱用のための有機溶剤の入手可能性について

乱用のための有機溶剤の入手可能性についての回答の分布を表 60 に示した。

「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が男性で 57%、女性で 62%と半数を超えていたが、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだ者の合計は、男性で 72.6%、女性で 69.5%にものぼった。全体では「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が 60%であるのに対して、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだ者の合計が、逆に 72%にものぼっていた。両群間には明らかな違い ($p < 0.01$) が認められた。

(2) 大麻の入手可能性について

大麻の入手可能性についての回答の分布を表

表 62 覚せい剤の入手可能性

	生涯シナ-経験						全体	
	なし		あり		無回答			
男性	簡単に手に入る	2625 (8.6)	124 (24.3)	33 (13.4)	2782 (8.9)			
	苦勞するが手に入る	4711 (15.4)	113 (22.1)	39 (15.9)	4863 (15.5)			
	ほとんど不可能	6672 (21.8)	107 (20.9)	46 (18.7)	6825 (21.8)			
	絶対不可能	15963 (52.2)	156 (30.5)	107 (43.5)	16226 (51.8)			
	無回答	588 (1.9)	11 (2.2)	21 (8.5)	620 (2.0)			
	合計	30559 (100.0)	511 (100.0)	246 (100.0)	31316 (100.0)			
						$(\chi^2 = 200.109, df = 3, p = .000)$		
女性	簡単に手に入る	2314 (7.6)	63 (23.2)	17 (10.7)	2394 (7.8)			
	苦勞するが手に入る	5320 (17.6)	82 (30.1)	29 (18.2)	5431 (17.7)			
	ほとんど不可能	6227 (20.6)	50 (18.4)	30 (18.9)	6307 (20.5)			
	絶対不可能	15813 (52.2)	72 (26.5)	68 (42.8)	15953 (51.9)			
	無回答	627 (2.1)	5 (1.8)	15 (9.4)	647 (2.1)			
	合計	30301 (100.0)	272 (100.0)	159 (100.0)	30732 (100.0)			
						$(\chi^2 = 142.353, df = 3, p = .000)$		
全体	簡単に手に入る	4944 (8.1)	188 (24.0)	50 (12.3)	5182 (8.3)			
	苦勞するが手に入る	10040 (16.5)	195 (24.9)	68 (16.8)	10303 (16.6)			
	ほとんど不可能	12908 (21.2)	157 (20.0)	76 (18.8)	13141 (21.2)			
	絶対不可能	31783 (52.2)	228 (29.1)	175 (43.2)	32186 (51.8)			
	無回答	1216 (2.0)	16 (2.0)	36 (8.9)	1268 (2.0)			
	合計	60891 (100.0)	784 (100.0)	405 (100.0)	62080 (100.0)			
						$(\chi^2 = 317.111, df = 3, p = .000)$		

61に示した。

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で23%、女子で24%であり、経験者群では、男子で46%、女子で54%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められ、「シンナー遊び」経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1996年調査では、入手可能性は男性の方が高かったが、今回は%上は女性の方が高くなっていた。

(3) 覚せい剤の入手可能性について

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で24%、女子で25%であり、経験者群では、男性で46%、女性で53%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められた。

この結果は、大麻の入手可能性の値とほぼ同じであり、同時に、「シンナー遊び」経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1998年調査では、入手可能性は男性の

方で高かったが、今回は%上は女性の方が高くなっていた。

以上、3つの違法性薬物の入手可能性については、考察で論じたい。

D. 考察

1. 本調査研究の位置づけ

わが国の中学生における「シンナー遊び」の広がりについての調査研究で、地域特性を考慮して行われた大規模なものとしては、当分担研究者の知る限り、1990年に当分担研究者らによって千葉県公立中学校12校5,240人を対象に行われた調査研究⁵⁾、その後の厚生科学研究費補助金による一連の調査研究(千葉県の公立中学校14校6,121人、1992年)¹⁴⁾、(関東地方一都六県公立中学校12校7,166人、1993年)¹⁵⁾、(千葉県の公立中学校15校6,795人、及び西日本のA県B市の全12校の全中学生6,358人、1994年)¹²⁾、1996年の第1回本全国調査¹⁰⁾、1998年の第2回本全国調査¹³⁾に限られている。

表63 「シンナー遊び」生涯経験率の推移 (%)

	1990年 ⁵⁾	1992年 ¹⁴⁾	1994年 ¹²⁾	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男 性	2.1	2.5	1.8	1.5	1.7	1.5	1.4	1.7	1.6
1年生	1.2	1.8	1.0	1.4	0.8	1.1	1.1	1.2	1.4
2年生	2.9	3.5	2.2	1.3	1.8	1.3	1.3	1.6	1.6
3年生	2.3	2.0	2.3	1.9	2.6	2.2	1.7	2.3	1.9
女 性	0.9	1.2	1.1	0.8	0.6	0.5	0.7	0.9	0.9
1年生	0.4	0.9	1.0	0.6	0.7	0.5	0.7	0.9	0.8
2年生	0.8	1.2	1.2	0.6	0.7	0.3	0.6	0.8	0.8
3年生	1.7	1.5	1.1	1.2	0.3	0.6	0.7	1.1	1.1
全 体	1.5	1.8	1.5	1.2	1.2	1.0	1.1	1.3	1.3
1年生	0.8	1.4	1.0	1.0	0.8	0.8	0.9	1.1	1.1
2年生	1.9	2.4	1.7	1.0	1.2	0.8	1.0	1.2	1.2
3年生	1.9	1.8	1.7	1.6	1.4	1.3	1.3	1.7	1.5
対象	千葉県 12校 5,240人	千葉県 14校 6,121人	千葉県 15校 6,795人	千葉県 8校 4,521人	千葉県 9校 5,362人	千葉県 7校 3,754人	全国 108校 54,048人	全国 148校 71,796人	全国 140校 62,080人

また、上記一連の調査研究をもとに、当分担研究者は、従来「シンナー遊び」経験者は母子家庭を中心に、「単親家庭」の子供に多いことが指摘されてきたが、一見問題なさそうな家庭の子供における「シンナー遊び」が、近年目につくようになってきたという臨床経験に対して、夕食頻度等の結果から、たとえ両親がそろっていても、質的に家庭の団らんが少ない「精神的欠損家庭」⁵⁾¹⁶⁾とでも言うべき家庭の子供に「シンナー遊び」経験者が少なからずいることを示唆してきた⁵⁾¹⁶⁾。

今回の調査研究は、上記一連の調査研究を継続表発展させたものであり、わが国では薬物乱用に関する第3回目の全国中学生調査である。

2. 「シンナー遊び」の広がりについて

今回の調査研究では、「シンナー遊び」の生涯経験率は、男子では1.6%（1年生1.4%、2年生1.6%、3年生1.9%）、女子では0.9%（1年生0.8%、2年生0.8%、3年生1.1%）、全体では1.3%（1年生1.1%、2年生1.2%、3年生1.5%）であった。この結果は、男女合わせた全体では、1996年に実施した第1回全国調査の結果よりは0.2%高い値であるが、1998年に実施し

た第2回調査の結果と同じであり、男性では第2回調査の結果より0.1%減少したものの、女性では横這いであることを示している。（表63）。

しかし、この種の調査で最も問題になるのは、結果の信頼性であろう。この信頼性は、自記式調査と同時に、何らかの客観的検査（たとえば尿からの馬尿酸の測定）を実施することによって、初めて明らかになることである。しかしながら、尿検査の実施は、個人の人権上の問題にも関わる難しい方法であり、実施は事実上不可能である。したがって、当研究者らは、類似した方法論にもとづく継続的な調査の結果によるトレンドを見ることが、本調査研究の主目的であると考えている。同時に「シンナー遊び」の広がりの増減を判断するには、生涯経験率だけではなく、いくつかの関連する指標の結果をも考慮して、総合的に判断する必要があると考えている。

一方、「シンナー遊び」を目撃したことのある率（目撃率：表64）、身近に「シンナー遊び」をしている人がいる率（乱用者を知っている率：表65）、「シンナー遊び」に誘われたことのある率（誘われ経験率：表66）は、中学生にとっての「シン

表64 「シンナー遊び」を実際に見たことがある者の率（%）

	1990年 ⁵⁾	1992年 ¹⁴⁾	1994年 ¹²⁾	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男 性	27.5	24.6	19.0	16.5	9.9	5.7	12.2	10.7	8.6
1年生	23.8	21.6	17.1	12.6	6.3	4.0	9.9	8.7	7.4
2年生	26.5	18.5	19.1	17.5	9.6	6.9	12.6	9.9	8.2
3年生	31.7	21.9	20.6	19.0	13.4	6.0	14.1	13.3	10.1
女 性	27.9	20.1	16.2	15.2	7.5	5.6	11.4	9.8	8.4
1年生	22.0	17.0	12.7	11.9	6.7	6.2	9.1	8.3	7.0
2年生	27.9	13.6	17.3	15.0	7.6	5.0	12.0	9.5	7.9
3年生	32.2	16.9	18.5	18.6	8.1	5.6	13.0	11.5	10.2
全 体	27.7	22.3	17.6	15.8	8.7	5.7	11.8	10.3	8.5
1年生	22.9	19.3	15.0	12.2	6.5	5.1	9.5	8.5	7.2
2年生	27.1	16.1	18.1	16.3	8.6	5.9	12.3	9.7	8.1
3年生	32.0	19.4	19.5	18.8	10.7	5.8	13.6	12.4	10.2
対象	千葉県 12校 5,240人	千葉県 14校 6,121人	千葉県 15校 6,795人	千葉県 8校 4,521人	千葉県 9校 5,362人	千葉県 7校 3,754人	全国 108校 54,048人	全国 148校 71,796人	全国 140校 62,080人

ナー遊び」の身近さを示す重要な指標である。これらは全て、男女ともに、学年が進むにしたがって率が高くなっており、先の生涯経験率と表裏一体の関係にある。本研究者は、この目撃率、乱用者を知っている率、誘われ経験率が、「シンナー遊び」の広がり間接的に反映する指標になると考えている。

今回の全国調査の結果では、第2回全国調査との比較では、男性、女性、全体の全てで、目撃率（表64）に関しては低下しており（10.3%から8.5%）、身近に「経験者がいる」と答えた者の率も、全てにおいて微減を示しているが（5.4%から4.9%）、「誘われた」ことのある者の率は男性では横這いであり、女性では微増を示し、全体でも微増を示していた（男性で1.9%のまま。女性で1.4%から1.5%。全体では1.6%から1.7%）。

以上を総合すると、男女合わせた全体では、「シンナー遊び」は横這い状態にあるが、男性では減少気味であるのに対して、女性では微増傾向が示唆されるということになる。以上の解釈は、千葉県での推移からも示唆されよう。

ただし、表1に示した各都道府県での実施率が生涯経験率に及ぼす影響もそれなりに考慮する必

要があろう。

3. 「シンナー遊び」と日常生活・家庭生活・友人関係

「シンナー遊び」経験者群と非経験者群との比較では、「起床時間の規則性」（表20）、「就床時間の規則性」（表21）、「朝食の摂取率」（表22）から見た日常生活の規則性、及び「学校生活への思い」（表23）、「クラブ活動の参加状況」（表24）、「親しく遊べる友人の存在」（表30）、「相談事の出来る友人の存在」（表31）において、統計学的有意差が認められており、「シンナー遊び」経験者群での日常生活の不規則さ、学校生活不適応、友人関係の希薄さが明かである。

これらの背景には、そもそもの家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられるが、表25～27に見る家族との夕食頻度の差は、今回の調査でも「シンナー遊び」経験者群と非経験者群とで歴然としている。

ところで、「父親との夕食頻度（表27）」は、「家族全員での夕食頻度（表25）」よりも低率になっており、これは明らかに矛盾であった。しかも、

表65 身近に「シンナー遊び」をしている人がいると答えた者の率（%）

	1990年 ⁵⁾	1992年 ¹⁴⁾	1994年 ¹²⁾	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回	1996年 ¹⁶⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男 性	9.4	8.0	4.6	9.1	3.7	2.4	4.8	5.0	4.3
1年生	5.6	7.0	3.7	7.0	2.3	1.7	3.5	3.4	2.8
2年生	10.4	4.2	4.2	10.8	3.6	2.2	4.5	4.9	4.4
3年生	11.8	8.9	5.7	9.4	5.1	3.1	6.4	6.6	5.5
女 性	14.0	9.0	5.4	7.3	3.6	3.2	5.6	5.8	5.5
1年生	8.2	8.2	3.3	4.8	3.5	3.4	3.9	4.1	4.0
2年生	14.2	6.0	6.5	8.3	4.1	2.4	6.2	5.8	5.0
3年生	18.1	9.5	6.5	8.6	3.2	3.9	6.8	7.4	7.4
全 体	11.6	8.5	5.0	8.2	3.6	2.9	5.2	5.4	4.9
1年生	6.8	7.6	3.5	5.9	2.9	2.6	3.7	3.7	3.4
2年生	12.2	5.0	5.2	9.5	3.8	2.3	5.3	5.3	4.7
3年生	14.9	9.2	6.1	9.0	4.2	3.6	6.6	7.0	6.5
対象	千葉県 12校 5,240人	千葉県 14校 6,121人	千葉県 15校 6,795人	千葉県 8校 4,521人	千葉県 9校 5,362人	千葉県 7校 3,754人	全国 108校 54,048人	全国 148校 71,796人	全国 140校 62,080人

この矛盾は、これまでの同種の調査⁵⁾¹⁰⁾¹³⁾でも毎回認められており、中学生の考えの中には、「家族全員での夕食」と言った時、父親は既に除外されている傾向がそれなりにあることを示唆している。つまり、その背景には、父親はいつも帰りが遅いものだという中学生の考え方を伺うことができる。

そもそも、当研究者らは、夕食には「一家団欒」という意味合いがあると考えて調査項目に入れてきた。しかし、この夕食頻度には地域差が大きく、都市部ほど低く、農村部・山間部ほど高い傾向がある⁵⁾¹⁴⁾¹⁵⁾。「一家団欒」には、家族としての精神的意味合いも含まれるが、特に都市部における生活様式の多様性を考慮すると、親子の共有時間についての、もう少し直接的な項目が必要であると考えていた。そこで「学校、塾、習い事、運動での時間以外、大人が不在の状態、毎日平均どの程度の時間を過ごしますか？」という項目も1998年より調べている(表28)。その結果、「シンナー遊び」非経験者では一日3時間以上大人不在で過ごす者は約13%であるのに対して、「シンナー遊び」経験者群では約26%にのぼるという結果を得た。つまり、夕食頻度の少なさも、少なくとも親子の

共有時間の少なさの一現れとして解釈できる。

また、中学生という年代は、基本的に親との相談頻度は低いようであるが(表29)、それでも「シンナー遊び」経験者群での相談頻度は有意に低く(表29)、ここでも「シンナー遊び」経験者群における親子の共有時間の少なさが示唆された。

結局、今回も、「シンナー遊び」経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじめず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁷⁾が多いという推定が成り立つと考えている。

表11～表12は「シンナー遊び」をしている者について、どのような気持ちを持っているのかを見たものである。表11～12では、経験者群と非経験者群での捉え方に、明らかな乖離が認められる。非経験者から見れば、経験者はほとんど「無関係」な人たち(90%以上)であり、経験者から見れば経験者は「気持ちがわかる」人たちである割合が非常に高いということである。本研究者らは、「シンナー遊び」経験者にとってわかる気がするという、その気持ちとは、受容感と帰属感を求める「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁶⁾の共通の思いであろうと推測している。

表66 「シンナー遊び」に誘われたことのある率の推移 (%)

	1990年 ⁵⁾	1992年 ¹⁴⁾	1994年 ¹²⁾	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男 性	3.0	3.5	1.9	2.3	2.5	1.6	1.7	1.9	1.9
1年生	2.0	3.1	0.3	1.0	0.9	0.8	1.2	0.9	1.3
2年生	3.5	2.1	1.9	2.7	3.0	1.1	1.7	1.8	1.8
3年生	3.5	3.6	3.5	3.1	3.4	2.7	2.4	2.8	2.5
女 性	2.2	3.7	1.4	2.0	0.9	1.3	1.5	1.4	1.5
1年生	0.8	2.7	1.1	1.8	1.1	2.0	1.1	0.9	1.1
2年生	2.0	1.2	1.1	1.8	0.9	0.7	1.6	1.4	1.4
3年生	3.3	3.2	2.1	2.3	0.6	1.4	1.8	1.9	2.1
全 体	2.6	3.6	1.7	2.1	1.7	1.5	1.6	1.6	1.7
1年生	1.5	2.9	0.7	1.4	1.0	1.4	1.1	0.9	1.2
2年生	2.8	1.7	1.5	2.3	1.9	0.9	1.6	1.6	1.6
3年生	3.3	3.4	2.8	2.7	2.0	2.1	2.1	2.3	2.3
対象	千葉県 12校 5,240人	千葉県 14校 6,121人	千葉県 15校 6,795人	千葉県 8校 4,521人	千葉県 9校 5,362人	千葉県 7校 3,754人	全国 108校 54,048人	全国 148校 71,796人	全国 140校 62,080人

有機溶剤乱用者への治療的介入の際に、当研究者らは、親の参加なくして子の回復はないと考えており、親子の共有時間を増やすことの重要性を説いているが⁽⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁸⁾、今回の結果はその理由の有力

な根拠である。

しかも、経験論的には、本調査の結果を保護者に紹介することが、保護者の意識変革には重要なようである。

表 67 違法薬物の入手可能性の比較

	簡単に 手に入る	苦勞するが 手に入る	ほとんど 不可能	絶対 不可能	無回答	全体
「シンナー遊び」未経験群（男子）	n=30,559					
有機溶剤	22.9	17.8	18.5	38.6	2.2	100.0
大麻	7.9	15.9	22.8	51.4	2.1	100.0
覚せい剤	8.6	15.4	21.8	52.2	1.9	100.0
「シンナー遊び」未経験群（女子）	n=30,301					
有機溶剤	15.0	20.3	19.6	42.7	2.4	100.0
大麻	6.0	17.5	22.1	52.2	2.2	100.0
覚せい剤	7.6	17.6	20.6	52.2	2.1	100.0
「シンナー遊び」未経験群（全体）	n=60,891					
有機溶剤	18.9	19.0	19.1	40.6	2.3	100.0
大麻	6.9	16.7	22.5	51.8	2.2	100.0
覚せい剤	8.1	16.5	21.2	52.2	2.0	100.0
「シンナー遊び」経験群（男子）	n=511					
有機溶剤	50.7	21.9	11.2	13.9	2.3	100.0
大麻	21.5	24.3	21.5	29.9	2.7	100.0
覚せい剤	24.3	22.1	20.9	30.5	2.2	100.0
「シンナー遊び」経験群（女子）	n=272					
有機溶剤	44.9	24.6	10.7	18.4	1.5	100.0
大麻	20.2	33.8	16.5	27.2	2.2	100.0
覚せい剤	23.2	30.1	18.4	26.5	1.8	100.0
「シンナー遊び」経験群（全体）	n=784					
有機溶剤	48.7	22.8	11.0	15.4	2.0	100.0
大麻	21.2	27.6	19.8	29.0	2.6	100.0
覚せい剤	24.0	24.9	20.0	29.1	2.0	100.0
男子	n=31,316					
有機溶剤	23.3	17.8	18.4	38.2	2.3	100.0
大麻	8.1	16.0	22.8	50.9	2.1	100.0
覚せい剤	8.9	15.5	21.8	51.8	2.0	100.0
女子	n=30,732					
有機溶剤	15.2	20.4	19.5	42.5	2.4	100.0
大麻	6.1	17.7	22.0	51.9	2.3	100.0
覚せい剤	7.8	17.7	20.5	51.9	2.1	100.0
全体	n=62,080					
有機溶剤	19.3	19.1	18.9	40.3	2.4	100.0
大麻	7.1	16.8	22.4	51.4	2.2	100.0
覚せい剤	8.3	16.6	21.2	51.8	2.0	100.0

4. 「シンナー遊び」による医学的害

薬物乱用防止には、薬物乱用による諸害をきちんと認識させることが重要である。ところが、「知識」があれば乱用しないかとなると、そうとも言えない面がある。

有機溶剤乱用による「歯の腐食」(表15)、「無動機症候群」(表18)、「フラッシュバック」(表19)についての知識は、男女共に、経験者群の方が知っているという結果であった。これらは、これまでの一連の同種の調査⁵¹⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁵⁾でも認められており、「知識」と「行動」の不一致を改めて確認する結果となった。

しかし、1998年の第2回調査では、従来⁵¹⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁵⁾に反して、「急性中毒死」(表14)、「多発神経炎」(表16)、「精神病状態」(表17)についての知識保有率は、「シンナー遊び」非経験者の方が高く、ここ数年間の薬物乱用防止教育推進の結果の可能性があるかと思われたが、今回の結果は、再び従来に戻った結果であった。

ただし、質的側面から見て、このような調査での知識保有率が表す知識の中身は疑問もある。いずれにしても、今後も薬物乱用防止教育を協力を押し進めていく必要がある。

なお、薬物乱用防止教育には、「知識が行動に結びつくとは限らない」という大きな課題が常に存在するわけで、これに関しては、知識教育を行った上で、次の段階として、薬物依存からの回復の苦しみをドキュメンタリー形式で紹介したビデオ(平成9年度文部省制作「なくした自由」)の活用が効果的と考えられる。

5. 大麻・覚せい剤の乱用経験

そもそも、大麻及び覚せい剤の乱用経験率は参考データとした方が妥当と思われるが、参考データは参考データなりに推移を見る必要がある。

今回の調査では、大麻の生涯経験率は、男女共に全学年で減少傾向を見せている。しかし、覚せい剤の生涯経験率は、男性及び全体では全ての学年で減少傾向を見せているが、女性に関しては1年生、2年生では横這いであり、言い換えれば女性での減少が鈍い。この傾向は女性での「シンナー遊び」に誘われたことのある者の率(表66)の微増と無関係とは思えない。薬物乱用が普遍化してくると、女性での乱用者率が上がることによって、乱用者の男女比が縮まってくるのであり、今後が危惧される結果と考えられる。

表67 これまでに大麻使用経験のある者の率の推移 (%)

	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男性	0.7	0.9	0.6
1年生	0.4	0.7	0.4
2年生	0.7	0.8	0.6
3年生	0.8	1.0	0.7
女性	0.3	0.5	0.3
1年生	0.3	0.5	0.2
2年生	0.3	0.4	0.3
3年生	0.3	0.5	0.3
全体	0.5	0.7	0.4
1年生	0.4	0.6	0.3
2年生	0.5	0.6	0.5
3年生	0.6	0.8	0.5

表68 これまでに覚せい剤使用経験のある者の率の推移 (%)

	1996年 ¹⁰⁾	1998年 ¹³⁾	今回
男性	0.4	0.7	0.5
1年生	0.3	0.5	0.4
2年生	0.4	0.7	0.5
3年生	0.5	0.8	0.6
女性	0.2	0.3	0.2
1年生	0.3	0.2	0.2
2年生	0.2	0.3	0.3
3年生	0.3	0.4	0.3
全体	0.3	0.5	0.4
1年生	0.3	0.4	0.3
2年生	0.3	0.5	0.4
3年生	0.4	0.6	0.4

表69 大麻の入手可能性の推移 (%)

	1998年 ¹³⁾	今回
男 性		
簡単に手に入る	25.6 (7.6)	21.5 (7.9)
苦勞するが手に入る	25.0 (15.1)	24.3 (15.9)
ほとんど不可能	18.1 (23.9)	21.5 (22.8)
絶対不可能	28.3 (50.5)	29.9 (51.4)
不 明	3.0 (2.8)	2.7 (2.1)
女 性		
簡単に手に入る	24.5 (5.2)	20.2 (6.0)
苦勞するが手に入る	25.1 (15.7)	33.8 (17.5)
ほとんど不可能	21.7 (22.4)	16.5 (22.1)
絶対不可能	24.5 (54.2)	27.2 (52.2)
不 明	4.3 (2.5)	2.2 (2.2)
全 体		
簡単に手に入る	25.2 (6.4)	21.2 (6.9)
苦勞するが手に入る	25.0 (15.4)	27.6 (16.7)
ほとんど不可能	19.4 (23.2)	19.8 (22.5)
絶対不可能	27.0 (52.3)	29.0 (51.8)
不 明	3.5 (2.7)	2.6 (2.2)

%は「シンナー遊び」の経験者群（非経験者群）

表70 覚せい剤の入手可能性の推移 (%)

	1998年 ¹³⁾	今回
男 性		
簡単に手に入る	28.5 (8.5)	24.3 (8.6)
苦勞するが手に入る	22.7 (15.1)	22.1 (15.4)
ほとんど不可能	18.3 (22.4)	20.9 (21.8)
絶対不可能	27.7 (51.4)	30.5 (52.2)
不 明	2.9 (2.7)	2.2 (1.9)
女 性		
簡単に手に入る	26.0 (6.7)	23.2 (7.6)
苦勞するが手に入る	25.4 (15.8)	30.1 (17.6)
ほとんど不可能	17.4 (21.0)	18.4 (20.6)
絶対不可能	26.9 (54.2)	26.5 (52.2)
不 明	4.3 (2.3)	1.8 (2.1)
全 体		
簡単に手に入る	27.6 (7.6)	24.0 (8.1)
苦勞するが手に入る	23.6 (15.4)	24.9 (16.5)
ほとんど不可能	18.0 (21.7)	20.0 (21.2)
絶対不可能	27.4 (52.8)	29.1 (52.2)
不 明	3.3 (2.5)	2.0 (2.0)

%は「シンナー遊び」の経験者群（非経験者群）

第3次覚せい剤乱用期の特徴の一つは、若年層までへの乱用の拡大であり、今後も嚴重に調査していく必要がある。

6. 違法薬物の入手可能性の比較

1993年以来、一部の外国人を中心に、大麻および覚せい剤が、大都会では路上で密売されるようになり、第3次覚せい剤乱用期を作り出した⁹⁾。その影響と思われるが、1996年の1年間に覚せい剤取締法により検挙された高校生の数は対前年度比2.3倍と激増した⁹⁾。いくら有機溶剤乱用の勢いが鈍ったようだと言っても、この現実には、わが国の薬物汚染状況の深刻化以外の何物でもない。

表 67 は、本調査による違法薬物の入手可能性の比較である。

有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その気になれば入手は極めて簡単である。しかし、表 67 の結果は「簡単に手に入る」を選んだ者が、予想外に少ない。どうやら、「シンナー遊び」のための「有機溶剤」という問いの言葉から、トルエンの入手を想定した者が多かった可能性がある。ただし、大麻、覚せい剤の入手可能性に比べれば、「シンナー遊び」の経験の有無に関わらず、常に高い結果であり、実感として納得できるところである。

問題は大麻及び覚せい剤の入手可能性である。女性を除けば、男性及び全体で「シンナー遊び」経験者群では大麻の入手可能性も覚せい剤の入手可能性も減少傾向を示しているが、「シンナー遊び」非経験者群では、入手可能性の増加傾向が伺われる。薬物乱用非経験者は関連情報をマスメディアから得る傾向にあり、結果として、印象をそれに左右される面がある。一方、経験者群は体験的ないしは実情に近い情報を得ていることが少なくない。したがって、1998年と2000年との変化をどう読むかは、難しい問題である。

ただし、女性に関しては、覚せい剤の入手可能性は、「シンナー遊び」の経験の有無に関わらず、減少傾向とは言えず、「シンナー遊び」に誘われたことのある者の率、覚せい剤の乱用経験率での女性での特徴と同様に気がかりな結果であった。

今後の継続的な調査が要求される項目である。

7. 薬物乱用に対する法の遵守性

わが国の規制薬物乱用が、多くの国に比べて少ない背景には、国民の法に対する遵守性の高さがあるのではないかと本研究からは推定している。

喫煙については非喫煙群全体の13%（表 34）の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、「シンナー遊び」に関しては、それを選んだ者は「シンナー遊び」非経験者群全体の4%（表 9）に過ぎず、大麻では「シンナー遊び」非経験者全体の2%（表 55）であったことは、同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤乱用への垣根は高いことを物語っている。（覚せい剤に関しては、尋ねていない）

しかも、表 54 と表 58 に示したように、「シンナー遊び」の経験と大麻・覚せい剤乱用の経験とは、強い結びつきを持っており、わが国では「シンナー遊び」は大麻・覚せい剤乱用への「ゲイトウェイ・ドラッグ」としてとらえてかまわないであろう。

8. 「ゲイトウェイ・ドラッグ」としてのタバコとアルコール

中学生における喫煙及び飲酒が「シンナー遊び」への「ゲイトウェイ」になっている可能性が高いことは以前より指摘してきたが⁵⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、表50及び表52の結果は、大人が同伴しない飲酒と「シンナー遊び」との結びつきの強さと、喫煙経験と「シンナー遊び」との結びつきの強さを再確認させるものである。このことは、薬物乱用・依存に果たす「仲間」の役割の大きさを強く示唆している。

中学生における喫煙・飲酒防止を行う際には重視すべき重要な点の一つと考えられる。

E. 結論

わが国の中学生における薬物乱用の広がりを把握し、特に有機溶剤乱用に関する危険因子を特定することによって、中学生に対する薬物乱用防止対策の基礎資料として資するために、飲酒・喫煙・有機溶剤乱用に対する意識・実態、大麻・覚せい剤乱用に対する意識・実態調査を実施した。調査期間は、2000年10月中（一部11～12月中）であり、層別1段集落抽出法により選ばれた全国190校の全生徒を対象に、自記式調査を実施した。その

結果、140校（対象校の73.7%）より、62,198人（対象校190校の全生徒の63.9%前後）の回答を得た。有効回答数は62,080人（対象校190校の全生徒の63.8%前後）であった。

ただし、回答が得られなかった県が1県あり、都道府県毎の回答率には、未だ少々ばらつきがあることをふまえた上で、本調査の結果を利用する必要がある。

このような限界はあるが、以下のような結論を得た。

① 男子では1.6%（1年生1.4%、2年生1.6%、3年生1.9%）、女子では0.9%（1年生0.8%、2年生0.8%、3年生1.1%）、全体では1.3%（1年生1.1%、2年生1.2%、3年生1.5%）の者が、これまでに有機溶剤乱用を経験したことがあると回答した。

この結果は、男女合わせた全体では、1996年に実施した第1回全国調査の結果よりは0.2%高い値であるが、1998年に実施した第2回調査の結果と同じであり、男性では第2回調査の結果より0.1%減少したものの、女性では横這いであることを示している。

② 有機溶剤乱用の目撃率に関しては男性、女性、全体の全てにおいて低下しており（全体で10.3%から8.5%）、「経験者がいる」と答えた者の率も、全てにおいて微減を示していたが（全体で5.4%から4.9%）、「誘われた」ことのある者の率は男性では横這いであり、女性では微増を示し、全体でも微増を示していた（男性で1.9%のまま。女性で1.4%から1.5%。全体では1.6%から1.7%）。

③ 以上を総合すると、男女合わせた全体では、有機溶剤乱用は横這い状態にあるが、男性では減少気味であるのに対して、女性では微増傾向が示唆されるということになる。

以上の解釈は、千葉県での推移からも示唆された。

④ 有機溶剤乱用経験者群では、非経験者群に比べて、日常生活の規則性、学校生活、家庭生活、友人関係において、好ましくない傾向が統計学的有意差を持って強いことが再確認された。

⑤ その背景には、家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられる。経験者群では、「親との相談頻度」「家族との夕食頻度」が有意に低く、逆に「大人不在での時間」が有意に長く、親子の共有時間が少ない傾向がうかがわれた。

⑥ 結局、有機溶剤経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじめず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」と推定することができよう。

⑦ また、中学生における喫煙と大人が同伴しない飲酒は、有機溶剤乱用と強い繋がりを持っており、これらは、有機溶剤乱用への「ゲイトウェイ」となっている可能性が強く示唆された。

⑧ 有機溶剤乱用による医学的害では、「歯の腐食」、「無動機症候群」、「フラッシュバック」についての知識は、男女共に、経験者群の方が知っているという結果であった。これらは、これまでの一連の調査でも認められており、「知識」と「行動」の不一致を改めて確認する結果となった。

⑨ 大麻の生涯経験率は、男子で0.6%、女子で0.3%、全体で0.4%であり、覚せい剤の生涯経験率は、男子で0.5%、女子で0.2%、全体で0.4%であった。

大麻の生涯経験率は、男女共に全学年で減少傾向を見せていた。しかし、覚せい剤の生涯経験率は、男性及び全体では全ての学年で減少傾向を見せていたが、女性に関しては、1年生、2年生では横這いであり、言い換えれば女性での減少が鈍かった。この傾向は女性での有機溶剤乱用に誘われたことのある者の率の微増と無関係とは思えない。薬物乱用が普遍化してくると、女性での乱用者率が上がることによって、乱用者の男女比が縮まってくるのであり、今後が危惧される結果と考えられる。

ただし、結果の数字自体が、無回答の者の割合よりも低く、積極的に論じることはできないが、今後も推移を見る必要がある。

⑩ 違法性薬物の入手可能性については、有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その入手可能性への認識は高かった。

大麻の入手可能性について、入手可能と認識していた者は有機溶剤乱用未経験者群では、男子の23%、女子の24%であったが、経験者群では、男子で46%、女子で54%であり、有機溶剤乱用経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

覚せい剤の入手可能性について、入手可能と認識していた者は有機溶剤乱用未経験者群では、男子の24%、女子の25%であったが、経験者群では、男子で46%、女子で53%であり、有機溶剤

乱用経験者群での覚せい剤入手可能性の高さが強く示唆された。

これらは、第3次覚せい剤乱用期を象徴するような結果（入手可能性の高さ）であった。

⑪ 薬物の乱用経験率には、法の遵守性が大きく影響する。喫煙については非喫煙群全体の13%の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、有機溶剤乱用については、それを選んだ者は有機溶剤乱用非経験者群全体の4%に過ぎず、大麻では有機溶剤乱用非経験者全体の2%であった。同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤・大麻乱用への垣根は高いことを物語っていた。

⑫ しかし、有機溶剤乱用の経験と、大麻・覚せい剤乱用の経験とは、強い結びつきが認められ、同時に、喫煙経験と有機溶剤乱用経験との間にも強い結びつきが認められた。中学生では、喫煙→有機溶剤乱用→大麻・覚せい剤乱用という流れがあることが強く示唆された。

謝辞

本調査研究にご回答をいただいた、多くの学校関係者および生徒、ならびに、本調査の実施に関して御尽力いただいた多くの方々に、心よりお礼を述べさせていただきます。

また、調査用紙回収後の困難な資料整理に協力していただいた、東京ダルク、茨城ダルクの協力者に感謝いたします。

参考文献

1) 尾崎 茂、和田 清、福井 進：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成10年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）。pp. 85-116. 1999.

2) 和田 清、福井 進：覚せい剤精神病の臨床症状—覚せい剤使用年数との関係—、アルコール研究と薬物依存 25:143-158, 1990.

3) 和田 清：“Gateway Drug”概念について、日本アルコール・薬物医学会雑誌 34(2): 95-106, 1999.

4) Wada, K., Fukui, S.: Demographic and

Social Characteristics of Solvent Abuse Patients in Japan. The American Journal on Addictions 3:165-176, 1994.

5) Wada, K., Fukui, S.: Prevalence of volatile solvent inhalation among junior high school students in Japan and background life style of users. Addiction 88: 89-100, 1993.

6) Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Cigarette smoking and solvent use among Japanese adolescents. Drug and Alcohol Dependence 46: 137-145, 1997.

7) Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Reflecting Adult Drinking Culture: Prevalence of Alcohol Use and Drinking Situations among Japanese Junior High School Students in Japan. Journal of Studies on Alcohol 59: 381-386, 1998.

8) 和田 清：中学生における飲酒—飲酒文化の反映—。日本アルコール・薬物医学会雑誌 34: 36-48, 1999.

9) 和田 清：薬物乱用の現状と歴史。神経精神薬理 19: 913-923, 1997.

10) 和田 清、勝野真吾、尾崎米厚、中野良吾：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究。平成8年度厚生科学研究費補助金（麻薬等対策総合研究事業）研究報告書「薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究班」（主任研究者：寺元 弘）第1分冊薬物乱用・依存の多面的疫学調査研究（2）。pp. 21-60. 1997.

11) 文部省大臣官房調査統計企画課：全国学校総覧2000年版。原書房。東京。1999.

12) 和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成6年度研究成果報告書。pp. 35-60. 1995.

13) 和田 清、中野良吾、尾崎米厚、勝野真吾：

薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査、平成10年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清），pp. 19-83. 1999.

14) 和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究、平成4年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成4年度研究成果報告書，pp. 25-63. 1993.

15) 和田 清：中学生における「シンナー遊び」・

喫煙・飲酒についての調査研究、平成5年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成5年度研究成果報告書，pp. 27-54. 1994.

16) 和田 清：有機溶剤乱用発生の社会的背景—青少年にとり有機溶剤とは何か—、アルコール医療研究 8: 179-184, 1991.

17) 和田 清：中学生における飲酒—飲酒文化の反映—、日本アルコール・薬物医学会雑誌34: 36-48, 1999.

18) 和田 清：有機溶剤乱用と家族、精神保健研究 7: 13-17, 1994.

飲酒・喫煙・薬物乱用についての意識・実態調査

(第6版-00)

飲酒・喫煙・薬物乱用は、青少年の心と体の両面に様々な害を及ぼします。

この調査は、今日の中学生在が飲酒・喫煙・薬物乱用をどの様に考えており、また、実際にどのくらいの人が飲酒・喫煙・薬物乱用を経験しているかを調べ、今後の対策の参考にします。

回答者がわからないように以下のように配慮されています。

- ・この調査用紙には、氏名など個人を見つけ出せそうなものを書くところはありません。
- ・先生には、必要に応じて、生徒の質問に答えていただきますが、必要以上に生徒の所には行かず、生徒が書きやすいように努めていただきます。
- ・書き終わったら、配られた封筒に用紙を入れて封をし、先生の持っている大きな袋に封筒ごと入れてください。
- ・調査用紙は、封を切られることなく（学校の先生などに結果を知られることなく）、下記の研究室に運ばれ、研究室で開封し、厳重に保管され、研究以外の目的には使用しません。
- ・調査結果も、集められた結果を全体でまとめて処理します。個人が特定されることはありません。

各質問に対する回答は、ことわりがない限り、自分の場合に最も近いものの数字を一つだけ、丸で囲んでください。

実施機関：国立精神・神経センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 千葉県市川市国府台1-7-3 TEL. 047-372-0111

（質問1）あなたは男性ですか、女性ですか？

1. 男性 2. 女性

（質問2）あなたは中学何年生ですか？

1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生

（質問3）あなたの起床時間は、ほぼ一定していますか？

1. はい 2. いいえ

（質問4）あなたの就寝時間は、ほぼ一定していますか？

1. はい 2. いいえ

（質問5）あなたは、毎朝、朝食を食べていますか？

1. ほとんど毎日食べている
2. 時々食べる
3. ほとんど食べない

（質問6）あなたにとって、学校生活は次のどれですか？

1. とても楽しい。
2. どちらかといえば楽しい

- 3. あまり楽しくない
- 4. まったく楽しくない

(質問7) あなたはクラブ活動(部活)に参加していますか?

- 1. 積極的に参加している
- 2. 消極的に参加している
- 3. 参加していない

(質問8) あなたは、母親と週何回くらい夕食を食べますか?

- 1. ほとんど毎日
- 2. 5~6回
- 3. 4回前後
- 4. 3回前後
- 5. 2回前後
- 6. ほとんど食べない
- 7. 母親がいない(単身赴任、死別、別居、離婚など)

(質問9) あなたは、父親と週何回くらい夕食を食べますか?

- 1. ほとんど毎日
- 2. 5~6回
- 3. 4回前後
- 4. 3回前後
- 5. 2回前後
- 6. ほとんど食べない。
- 7. 父親がいない(単身赴任、死別、別居、離婚など)

(質問10) あなたは、夕食を週何回くらい家族全員で食べますか?

- 1. ほとんど毎日
- 2. 5~6回
- 3. 4回前後
- 4. 3回前後
- 5. 2回前後
- 6. ほとんど食べない

(質問11) あなたは、学校・塾・習い事・運動での時間以外、大人が不在の状態、毎日平均どの程度の時間を過ごしますか?

- 1. なし、あるいは、ほとんどなし
- 2. 1時間未満
- 3. 1時間以上2時間未満
- 4. 2時間以上3時間未満
- 5. 3時間以上

(質問12) あなたは、親しく遊べる友人がいますか?

- 1. いる
- 2. いない

(質問13) あなたは、相談事のできる友人がいますか?

- 1. いる
- 2. いない

(質問14) あなたは、悩みごとがある時、親と相談する方だと思いますか?

- 1. よく相談する方である
- 2. どちらかと言えば相談する方である
- 3. どちらかと言えば相談しない方である
- 4. ほとんど相談しない方である
- 5. 親がいない(単身赴任、死別、別居、離婚など)

(質問15) あなたは、これまでに一回でも、タバコを吸ったことがありますか?
(ある場合は、初めて吸った時の年齢を選んでください。)

- 1. 吸ったことがない
- 2. 10歳以下
- 3. 11歳
- 4. 12歳
- 5. 13歳
- 6. 14歳
- 7. 15歳以上
- 8. 吸ったことはあるが、年齢はおぼえていない

(質問16) あなたは、この1年間で、タバコを吸ったことがありますか?

- 1. 一度も吸わなかった
- 2. 1年間で1~数回吸った
- 3. 月に数回吸った
- 4. 週に数回吸った
- 5. ほとんど毎日吸った

(質問17) あなたは、健康面から、喫煙をどう思いますか?

- 1. 害ばかりで、良い面はないと思う
- 2. 害もあるが、良い面もあると思う
- 3. 害よりも、良い面の方が多いと思う

(質問18) 未成年者の喫煙は法律で禁じられていますが、あなたは未成年者の喫煙をどう思いますか?

- 1. 法律で禁じられているから、吸うべきでないと思う
- 2. 法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う
- 3. 法律で禁じられてはいるが、全然かまわないと思う

(質問19) あなたは、未成年者の喫煙禁止をどう思いますか?

- 1. 当然だと思う
- 2. しかたのないことだと思う
- 3. 成人が吸えて、未成年者が吸えないのはおかしいと思う
- 4. そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う

(質問20) あなたは、これまでに、下記の時に、一回でも、アルコール（ビール、日本酒、焼酎^{しょうちゅう}、ワイン、ウィスキーなど）を飲んだことがありますか？

(いくつ選んでもけっこうですが、なめただけの場合は、含めないで下さい。ただし、「1」を選んだときには、その他は選ばないでください。)

1. 飲んだことがない
2. 冠婚葬祭（結婚式・祭り・葬式・法事・盆・正月など）の時に飲んだことがある
3. 家族での食事などの時に、家族といっしょに飲んだことがある
4. クラス会、打ち上げ、友達とのパーティーの時に、仲間と飲んだことがある
5. カラオケボックス、居酒屋、飲み屋などで、仲間と飲んだことがある
6. 自分や誰かの部屋で、仲間と飲んだことがある
7. 一人で飲んだことがある

(質問21) あなたは、上記のいずれかの機会に、初めてアルコールを飲んだ（なめただけの場合は、含めないで下さい。）のは、何歳の時ですか？

1. 飲んだことがない
2. 10歳以下
3. 11歳
4. 12歳
5. 13歳
6. 14歳
7. 15歳以上
8. 飲んだことはあるが、年齢はおぼえていない

(質問22) あなたは、この1年間に一回でも、アルコールを飲んだことがありますか？

(飲んだことのある機会をいくつ選んでもけっこうですが、なめただけの場合は、含めないで下さい。ただし、「1」を選んだときには、その他は選ばないでください。)

1. 飲んだことがない
2. 冠婚葬祭（結婚式・祭り・葬式・法事・盆・正月など）の時に飲んだことがある
3. 家族での食事などの時に、家族といっしょに飲んだことがある
4. クラス会、打ち上げ、友達とのパーティーの時に、仲間と飲んだことがある
5. カラオケボックス、居酒屋、飲み屋などで、仲間と飲んだことがある
6. 自分や誰かの部屋で、仲間と飲んだことがある
7. 一人で飲んだことがある

(質問23) あなたは、この1年間に、どのくらいの頻度でアルコールを飲みましたか？

1. 一度も飲まなかった
2. 1年間で1～数回飲んだ
3. 月に数回飲んだ
4. 週に数回飲んだ
5. ほとんど毎日飲んだ

(質問24) あなたは、健康面から、飲酒をどう思いますか？

1. 害ばかりで、良い面はないと思う
2. 害もあるが、良い面もあると思う
3. 害よりも、良い面の方が多いと思う

(質問25) 未成年者の飲酒は禁止されていますが、あなたは、未成年者の飲酒をどう思いますか？

1. 法律で禁止されているから、飲むべきではないと思う
2. 法律で禁止されてはいるが、時と場合に応じては、かまわないと思う
3. 法律で禁止されてはいるが、全然かまわないと思う

(質問26) あなたは、未成年者の飲酒禁止をどう思いますか？

1. 当然だと思う
2. しかたのないことだと思う
3. 成人が飲めて、未成年者が飲めないのはおかしいと思う
4. そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う

(質問27) あなたは、「シンナー遊び」をしているところを実際に見たことがありますか？

1. ない
2. ある

(質問28) あなたの身近に、「シンナー遊び」をしている人がいますか？

1. いない
2. いる

(質問29) あなたは、「シンナー遊び」に誘われたことがありますか？

1. ない
2. ある

(質問30) 「シンナー遊び」について、あなたの気持ちは次のどれに最も近いですか？

1. 関心がない
2. 見てみたい
3. 試してみたい
4. 経験がある

(質問31) あなたは、「シンナー遊び」をしている人について、どう思いますか？

1. 自分には無関係の人だと思う
2. 「シンナー遊び」をする気持ちが理解できる気がする
3. 親しみを感じる

(質問32) あなたは、「シンナー遊び」をしている人と親しくなることについて、どう考えますか？

1. 親しくなりたくない
2. 「シンナー遊び」だけで決めたくはない
3. すでに親しい

(質問33) あなたは、これまでに一回でも、「シンナー遊び」を経験したことがありますか？
(ある場合は、初めて経験した時の年齢を選んでください。)

1. 経験がない
2. 10歳以下
3. 11歳
4. 12歳
5. 13歳
6. 14歳
7. 15歳以上
8. 経験はあるが、年齢はおぼえていない

(質問34) あなたは、この1年間に一回でも、「シンナー遊び」をしたことがありますか？

1. ない
2. ある

(質問35) 「シンナー遊び」は法律で禁止されていますが、あなたは「シンナー遊び」について、どう思いますか？

1. 法律で禁止されているから、すべきではないと思う
2. 法律で禁止されてはいるが、少々ならかまわないと思う
3. 法律で禁止されてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う

(質問36) あなたは、法律で「シンナー遊び」を禁止しているのをどう思いますか？

1. 当然だと思う
2. しかたのないことだと思う
3. 麻薬・覚せい剤とちがって、シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと思う
4. そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う

(質問37) あなたは、「シンナー遊び」で死亡すること（急性中毒死）があるのを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問38) あなたは、「シンナー遊び」を繰り返すと、歯がぼろぼろになりやすいことを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問39) あなたは、「シンナー遊び」を繰り返すと、手足の筋肉や神経が衰え、物をつかめなくなったり、歩けなくなること（多発神経炎）があるのを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問40) あなたは、「シンナー遊び」を繰り返すと、何もないのに物が見えたり（幻視）、実際には何も聞こえないのに、声が聞こえたり（幻聴）、誰も何とも思っていないのに、人が自分の事を非難していると思ひ込んだり（妄想）する状態（精神病状態）になることがあるのを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問41) あなたは、「シンナー遊び」を繰り返すと、何事にも関心が持てなくなり、結果的に学校を欠席しがちになり、どんな仕事に就いても、長続きしなくなること（無動機症候群）を知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問42) あなたは、「シンナー遊び」の結果、幻視、幻聴、妄想が出るようになってしまうと、それを治療して治っても、その後「シンナー遊び」をやめていても、疲れ・ストレス・飲酒などで、幻視、幻聴、妄想が再び出現すること（フラッシュバック）があるのを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問43) あなたは、「シンナー遊び」をしている人たちは、どうして「シンナー遊び」するのだと思いますか？
(いくつ選んでもけっこうです。)

1. 本人に問題があるから
2. 家庭に問題があるから
3. 学校に問題があるから
4. 社会に問題があるから

(質問44) あなたは、これまでに一回でも、大麻（マリファナ、ハッシュシュも同じものです）を吸ったことがありますか？（ある場合は、初めて吸った時の年齢を選んでください。）

1. 経験がない
2. 10歳以下
3. 11歳
4. 12歳
5. 13歳
6. 14歳
7. 15歳以上
8. 経験はあるが、年齢はおぼえていない

(質問45) あなたは、大麻を吸うことをどう思いますか？

1. 吸うべきではないと思う
2. 麻薬・覚せい剤とちがって、少々ならかまわないと思う
3. まったくかまわないと思う

(質問46) あなたは大麻を吸うと、上記の質問40や質問41と同じ精神^{せいしんびょうじょうたい}病^{びょう}状態^{じょうたい}や無動機^{むどうきしょうこうぐん}症候群^{しやうこうぐん}になることがあるのを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問47) あなたは、これまでに一回でも、覚せい剤（スピード、エスも同じものです）を使用したことがありますか？（ある場合は、初めて使用した時の年齢を選んでください。）

1. 経験がない
2. 10歳以下
3. 11歳
4. 12歳
5. 13歳
6. 14歳
7. 15歳以上
8. 経験はあるが、年齢はおぼえていない

(質問48) 覚せい剤を使うと、上記の質問40と同じ精神病^{せいしんびょうじょうたい}状態^{じょうたい}になりやすく、また質問42のようなフラッシュバックがあることを知っていますか？

1. 知っている
2. 知らない

(質問49) あなたが「シンナー遊び」のために有機溶剤を手に入れようとした場合、それはどの程度むずかしいですか？

1. 簡単に手に入る
2. 少々苦勞するが、なんとか手に入る
3. ほとんど不可能だ
4. 絶対不可能だ

(質問50) あなたが大麻を手に入れようとした場合、それはどの程度むずかしいですか？

1. 簡単に手に入る
2. 少々苦勞するが、なんとか手に入る
3. ほとんど不可能だ
4. 絶対不可能だ

(質問51) あなたが覚せい剤を手に入れようとした場合、それはどの程度むずかしいですか？

1. 簡単に手に入る
2. 少々苦勞するが、なんとか手に入る
3. ほとんど不可能だ
4. 絶対不可能だ

ご協力ありがとうございました。

薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査（2000年）－要約版－

分担研究者 和田 清 国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部長
研究協力者 菊池安希子 同上 流動研究員
尾崎米厚 鳥取大学医学部 衛生学教室 助教授
勝野眞吾 兵庫教育大学 学校教育学部 教授

わが国の中学生における薬物乱用の広がり把握し、特に有機溶剤乱用に関する危険因子を特定することによって、中学生に対する薬物乱用防止対策の基礎資料として資するために、飲酒・喫煙・有機溶剤乱用に対する意識・実態、大麻・覚せい剤乱用に対する意識・実態調査を実施した。調査期間は、2000年10月中（一部11～12月中）であり、層別1段集落抽出法により選ばれた全国190校の全生徒を対象に、自記式調査を実施した。その結果、140校（対象校の73.7%）より、62,198人（対象校190校の全生徒の63.9%前後）の回答を得た。有効回答数は62,080人（対象校190校の全生徒の63.8%前後）であった。

ただし、回答が得られなかった県が1県あり、都道府県毎の回答率には、未だ少々ばらつきがあることをふまえた上で、本調査の結果を利用する必要がある。

このような限界はあるが、以下のような結論を得た。

① 男子では1.6%（1年生1.4%、2年生1.6%、3年生1.9%）、女子では0.9%（1年生0.8%、2年生0.8%、3年生1.1%）、全体では1.3%（1年生1.1%、2年生1.2%、3年生1.5%）の者が、これまでに有機溶剤乱用を経験したことがあると回答した。

この結果は、男女合わせた全体では、1996年に実施した第1回全国調査の結果よりは0.2%高い値であるが、1998年に実施した第2回調査の結果と同じであり、男性では第2回調査の結果より0.1%減少したものの、女性では横這いであることを示している。

② 有機溶剤乱用の目撃率に関しては男性、女性、全体の全てにおいて低下しており（全体で10.3%から8.5%）、「経験者がいる」と答えた者の率も、全てにおいて微減を示していたが（全体で5.4%から4.9%）、「誘われた」ことのある者の率は男性では横這いであり、女性では微増を示し、全体でも微増を示していた（男性で1.9%のまま。女性で1.

4%から1.5%。全体では1.6%から1.7%）。

③ 以上を総合すると、男女合わせた全体では、有機溶剤乱用は横這い状態にあるが、男性では減少気味であるのに対して、女性では微増傾向が示唆されるということになる。

以上の解釈は、千葉県での推移からも示唆された。

④ 有機溶剤乱用経験者群では、非経験者群に比べて、日常生活の規則性、学校生活、家庭生活、友人関係において、好ましくない傾向が統計学的有意差を持って強いことが再確認された。

⑤ その背景には、家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられる。経験者群では、「親との相談頻度」「家族との夕食頻度」が有意に低く、逆に「大人不在での時間」が有意に長く、親子の共有時間が少ない傾向がうかがわれた。

⑥ 結局、有機溶剤経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじみず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」と推定することができよう。

⑦ また、中学生における喫煙と大人が同伴しない飲酒は、有機溶剤乱用と強い繋がりを持っており、これらは、有機溶剤乱用への「ゲイトウェイ」となっている可能性が強く示唆された。

⑧ 有機溶剤乱用による医学的害では、「歯の腐食」、「無動機症候群」、「フラッシュバック」についての知識は、男女共に、経験者群の方が知っているという結果であった。これらは、これまでの一連の調査でも認められており、「知識」と「行動」の不一致を改めて確認する結果となった。

⑨ 大麻の生涯経験率は、男子で0.6%、女子で0.3%、全体で0.4%であり、覚せい剤の生涯経験率は、男子で0.5%、女子で0.2%、全体で0.4%であった。

大麻の生涯経験率は、男女共に全学年で減少傾向を見せていた。しかし、覚せい剤の生涯経験率は、男性及び全体では全ての学年で減少傾向を見せていたが、女性に関しては、1年生、2年生で

は横這いであり、言いかえれば女性での減少が鈍かった。この傾向は女性での有機溶剤乱用に誘われたことのある者の率の微増と無関係とは思えない。薬物乱用が普遍化してくると、女性での乱用者率が上がることによって、乱用者の男女比が縮まってくるのであり、今後が危惧される結果と考えられる。

ただし、結果の数字自体が、無回答の者の割合よりも低く、積極的に論じることはできないが、今後も推移を見る必要がある。

⑩ 違法性薬物の入手可能性については、有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その入手可能性への認識は高かった。

大麻の入手可能性について、入手可能と認識していた者は有機溶剤乱用未経験者群では、男子の23%、女子の24%であったが、経験者群では、男子で46%、女子で54%であり、有機溶剤乱用経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

覚せい剤の入手可能性について、入手可能と認識していた者は有機溶剤乱用未経験者群では、男子の24%、女子の25%であったが、経験者群では、男子で46%、女子で53%であり、有機溶剤乱用経験者群での覚せい剤入手可能性の高さが強く示唆された。

これらは、第3次覚せい剤乱用期を象徴するような結果（入手可能性の高さ）であった。

⑪ 薬物の乱用経験率には、法の遵守性が大きく影響する。喫煙については非喫煙群全体の13%の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、有機溶剤乱用については、それを選んだ者は有機溶剤乱用非経験者群全体の4%に過ぎず、大麻では有機溶剤乱用非経験者全体の2%であった。同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤・大麻乱用への垣根は高いことを物語っていた。

⑫ しかし、有機溶剤乱用の経験と、大麻・覚せい剤乱用の経験とは、強い結びつきが認められ、同時に、喫煙経験と有機溶剤乱用経験との間にも強い結びつきが認められた。中学生では、喫煙→有機溶剤乱用→大麻・覚せい剤乱用という流れがあることが強く示唆された。





